# 仮宿のカンパニュラ

Hyunckel & Maam
村のくらし

# 仮宿のカンパニュラ

**芳流（kaoru）**

**https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18007043**

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, 原作終了後

戦後数年経った後のヒュンマ。家族も増えてます。
「朝の収穫」novel/17700956とほぼ同じ頃。

以前、Twitterに流したカヅキuser/1688436さんに進呈した作品を修正して再掲載。

# 仮宿のカンパニュラ

　夏は、夜風が心地よい。
　ヒュンケルが、夕涼みに、裏庭の椅子に腰掛けていると、子どもたちが、息を切らせて駆け寄って来た。
　陽はとうに落ちており、テーブル上に置いたランプがぼんやりとした明るさを周囲に放っている。駆け寄る子どもたちの影が、ランプの光に照らされ、色を持った。
「おとうさん、おとうさん！！
　見て！見て！！」
「スゴいんだ！」
「キレイ〜。」
　父の腕を引っ張りながら、子どもたちは、口々にそう言うが、要領を得ない。いったい、何を見つけたのだろうのか。
　子どもたちの後ろで、マァムが苦笑していた。
　ヒュンケルは子どもたちに尋ねた。
「いったい、何が凄くて綺麗なんだ？」
「こっち〜！！」
　子どもたちが彼の手を引いて、庭の隅まで引っ張っていった。彼は子どもたちにされるがままになっていた。
　庭の隅までは、ランプの光は届かなかった。この日は月も細く、天の恵みの乏しい夜だった。
　だが、後から考えると、それが幸いしたと言えた。
　子どもたちは、庭の隅に着くと、しゃがみ込んだ。自分の口元に、小さな指を当てた。
「しー、ね。」
　静かにしろということらしい。
　後ろからマァムがやってきて、ヒュンケルに声をかけた。
「しゃがんだ方がいいかも。」
　彼は、よくわからなかったが、とりあえず、言われたとおりに腰を落とした。
　目の前には、小ぶりの紫色の花がある。筒状にまとまった花びら

が、まるで星のように放射状に先端を開いていた。
　確か、カンパニュラという名の花だったと、マァムが言っていた気がした。
　光源の乏しい庭の隅では、暗闇に慣れた目にも、花の形はかろうじてわかる程度で、ただ黒い影になっているだけだった。

　ヒュンケルは訳も分からずにいたが、やがて、彼の目の前で、ぼんやりと明かりが灯った。
　紫の花が、内側から仄かに光り輝いていた。それはまるで呼吸するかのように、淡く輝き、そして消え、また仄かに明かりを灯した。
　子どもたちが、小声で、しかし、興奮がはっきりわかる口調で父に呼びかけた。
「スゴイでしょう？」
「キレイでしょう？」
　ヒュンケルは軽く頷くと、呟いた。
「蛍か。」
　マァムも頷いた。
「花の中に入り込んじゃったみたい。
　花が光っているみたいよね。」
「そうだな・・・。」
　子どもたちもうんうん、と小さな頭を振っていた。
　蛍の潜り込んだ花は、内側から光を放ち、紫色が淡く輝いていた。
　ヒュンケルは、しばらく子どもたちとともに、蛍の息づく花びら越しの光を眺めていた。
「あっ。」
　子どもが声を上げたと同時だった。光の珠が、ふわりと宙に舞った。
　その光の軌跡を、子どもたちが目で追う。
　残念そうな声が上がった。
「あ〜あ、行っちゃった。」
「ざんねーん。」

「ばいばーい。」
「キレイだったのにー。」
　下の子は、ずいぶんしょんぼりとしていた。
　ヒュンケルは、子どもたちの頭を、それぞれ、軽くなでた。
「また来てくれるさ。」
「本当に？」
「ああ。
　さ、戻ろうか。」
「は〜い。」
　ヒュンケルは子どもたちを促して、家に戻ろうとした。

　道すがら、マァムがつぶやいた。
「私、あの花好きよ。
　なんだか、貴方を思い出すの。」
　そう言って、妻は優しく微笑んだ。

　その花の現す言葉は
　　　　　　　「誠実な愛」